慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | エウジェニオ・ガレン著 清水純一訳 イタリアのヒューマニズム : ルネサンスにおける哲学と市民生活 |
| Sub Title | |
| Author | 渡辺, 和一郎 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1960 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.5 (1960. 5) ,p.497(81)- |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19600501-0082 |
| Abstract | |
| Notes | 新刊紹介 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600501-0082 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いていえば、発刊の辞のいう通り現在までの世界史の発展の中で果してきたヨーロッパ諸民族の歴史のもつ先進的な役割が、何故可能であったのか？という根本的な問いを具体的な個別研究において深めているといえよう。とくに中世前期、後期にのせられた諸労作はヨーロッパ資本主義をその胎内からうみだすにいたったヨーロッパ封建制について新しい研究史の成果に立ったもので注目される。そこではかつてヨーロッパ封建制についてとなえられていた古典荘園制についての再吟味が様々の角度から行なわれている。とくに領主と農民という封建的生産関係が具体的に農民の共同体的な定住においてどのようになっているか？　といった問題が解明されている。

近世前期においては市民革命の時期の様々の問題が新しい研究の成果の上で解明されている。とくにイギリス市民革命をめぐる諸問題の解明に多くの頁がさかれ、内容的にも注目される。ヨーロッパ資本主義の中でも先進的な発展をとげたイギリス資本主義の道が市民革命を契機にきりひらかれていったことを思えば、当然のことであろう。

最後に簡単に批評をいえば諸労作の間の問題意識が必ずしも共通のものでない場合もあり、この点発刊の辞のいうような協力的研究体制が今後の歴史研究にとり不可欠のものであることが痛感される。又政治史や社会史その他との関連も社会経済史という以上もっと要求されてくるであろう。（弘文堂・全十巻・A5・各巻三五〇円）

—寺尾　誠—

*　　*　　*

気賀健三著

『ソビエト経済の研究』

ソ連経済はきわめて高い経済成長率を誇ってきた。しかし、ソ連の計画経済のメカニズムは、中央指導的計画経済固有の矛盾をもっている。本書は、この矛盾に光を当てるとともに、これに関連して、マルクス——→スターリン主義理論の根本的誤謬を鋭く指摘する。

先ずマルクスとスターリンと題された第一章においては、上部構造と下部構造との関係についての両者の見解の相違が指摘される。そして、スターリンが自ら上部構造の指導者の地位に立ったことが、上部構造の歴史的役割を力説したり、歴史における恒常的要因を重視するようになった一つの理由であると論じられる。第二章はスターリンの経済法則論の批判にあてられている。ここで、スターリンのいう「国民経済の計画的社会主義経済の基本的経済法則」が、客観的法則でなくソビエト権力の「公称目的、計画意図」の表明にすぎないこと、「国民経済の計画的（釣合のとれた）発展の法則」が現実にあらわれていないことが指摘されるが、以下の章は、この点を実証する役割をも果している。そこで特に強調されていることは、市場価格機構を基礎としない計画経済においては浪費、不均衡、低能率を避けがたいという点である。事実、ソ連経済の最近の動きをみると、価値法則の利用が強調され、商品生産の意義が再認され、計画機構の分権化が進んでいる。こうした方向への現実の動きは、マルクスの本来の理論においては説明し難いものであり、また、いくつかの点では、スターリンの命題をも超えて進んでいるといえる。結局、こうして、ソ連の計画経済は、その経済的合理性への要請が強まるとともに、市場経済的機構を基礎とする経済計画の方向にますます進まざるを得ないのではないか、というのが筆者の考えのように察せられる。



本書は論文集の形をとっているが、全体は以上のような主張によって貫ぬかれ、統一されている。即ち、前半においては、思想的理論的問題の解明に重点がおかれ、後半においては、主として実証的分析によって、前半の主張を裏付けるような議論がなされ、こうして、問題点を浮彫りにしている。

本書は、ソ連経済の讃美論とか単なる解説書とは全く異なり、ソ連経済の華やかな発展の蔭にある矛盾乃至問題点をえぐり出した注目すべき研究であるといえよう。（日本評論新社・A5・一八五頁・二八〇円）

—丸尾直美—

*　　*　　*

エウジェニオ・ガレン著

清水　純一　訳

『イタリアのヒューマニズム』

—ルネサンスにおける哲学と市民生活—

本書はイタリアの哲学史家ガレン教授のルネサンス思想史である。ルネサンスには独自な思想家が少ないため思想史的には従来見過されがちであった。しかし中世と近代の結び目としてその性格が明らかにされねばならぬ。本書はその要求に答えるものと言えよう。

著者の意図は、大小さまざまのヒューマニストの文献を駆使して、当時の市民生活において論じられた主題を、なるべくそのままに再現するにあった。必ずしも新しいルネサンス解釈を示そうとするものではない。豊富に用いられた資料自身によって語られるルネサンス思想史を、そこにみるのである。

ヒューマニズムが古典の再生をはかる文化運動であるのは言うまでもないが、それは古典を通じて古代の人々と会話をし、人間教育の助けにしようとするものであった。会話によって隣人と語りあう市民生活の意義を、ヒューマニスト達は高く評価した。孤立した冥想生活には何の意義も認めなかった。活動的な市民生活の範としては古典との会話を重んじた訳であるが、その古典は歴史の中に生きた古代人を具体的に示すものとしてとらえられた。新しい言語文献学は、古典を生きた言葉として史的背景の中に理解しようとする必要から生まれた。初期ヒューマニズムはこのように市民生活の自由を強調するものであったが、やがてフィレンツェの独裁者によってそれは脅かされるにいたる。フィレンツェに栄えるプラトニズムはその事情を反映して市民活動を逃避した冥想的性格を濃厚にしていき、その中で人間の尊厳性を極めようと試みる。他方パドヴァを中心にする伝統的なアリストテレス研究にも、変化が生じてくる。プラトニズムに誘発されて、アリストテリズムでは霊魂論、知性論が主題となるが、ここから論理学や方法論への道と自然探求への関心が開けてゆくことになる。このようにしてイタリアのヒューマニズムは、市民生活を重んじる人間の社会性と尊厳を強調し、一方で経験的合理性を基礎に自然科学へ接近してゆくことにより、近代思想の成立を促すことになる。ガレンの結論を直線的にひきだすのは危険を伴うが、以上はその一面をとりだしてみた。（創文社・A5・三四〇頁・七〇〇円）

—渡辺和一郎—

*　　*　　*